

音楽面からみる 16 世紀のイエズス会による東洋宣教と聖母崇敬

代表研究者 深堀 彩香
南山大学 南山宗教文化研究所 研究員

研究要旨

本研究は、対抗宗教改革期にあたる16世紀のカトリック教会で隆盛した「聖母崇敬」に着目し、イエズス会の東洋宣教を音楽的側面から考察して宣教地間の実態を比較する研究である。これまで16世紀のイエズス会による東洋宣教について研究を進める中で、各宣教地において聖母マリアに関する聖歌が頻繁に歌われ、また、聖母の図像が数多く作られていたことが明らかとなった。そこで、本研究では、16世紀にイエズス会が東洋で行なった音楽活動の実態を聖母崇敬という観点から考察することによって東洋宣教の実態をより具体的に捉え、当時ヨーロッパで起こったカトリック教会による対抗宗教改革が東洋に与えた影響を明らかにすることを目的とした。当時の東洋宣教で聖母マリアにまつわる事物が多かったのは、意図的なものだったのか否か、どのような理由があったのかを探り、最終的には16世紀当時の東西文化交渉やその連動性の一端を浮かび上がらせる。

イエズス会の東洋宣教における聖母崇敬を研究していくにあたり、まず16世紀ヨーロッパのカトリック教会の動向を明示する必要があるため、平成29年度は、当時のヨーロッパを中心としたカトリック教会における聖母マリアの位置づけと聖母崇敬の実態を調査し、本研究の基盤を固めることを目標とした。当時のヨーロッパで聖母崇敬を推奨していた重要な地に南ドイツの都市ミュンヘンが挙げられる。この都市における16～17世紀の聖母崇敬は、バイエルン君主や抗宗教改革、イエズス会と深く関係し、カトリック再興運動の一環として進められていた。今年度の研究を通して、聖母マリアがプロパガンダに用いられ、カトリック改革のシンボルとしての役割を担い、政治や宗教をはじめとする様々な側面で大きな影響を与え、その地に根をおろしていったことがわかった。また、聖母崇敬の影響は教会美術や音楽にまで及び、そのレパートリーに大きく関与していることも明らかとなった。これにより、対抗宗教改革期のイエズス会の音楽活動だけでなく、キリシタン音楽研究に対する新たな着想を得、本研究がこの分野の今後の研究の在り方に示唆を与えることができるという確信を持つことができた。
